

## 子どもが自らの学びを自覚的に捉える体育授業

体育科研究部

### 1 はじめに

体育科の授業を行っていく上で、教科としての課題は2点あると考える。1点目は、できること、できないことにこだわってしまう点である。特に水泳や器械運動などのクローズドスキルと呼ばれる領域においては、できる児童、できない児童が授業内ではっきりと見えるという特性がある。これは、できることだけに重きを置いた授業が行われやすいとも言えるだろう。本校体育科では、「できる」と「わかる」が往還関係のようにつながる授業実践をこれまで行ってきた。なぜなら、できることの根底にはわかることが必要であると考えているからである。ただできることで終わるのではなく、どうしてできたのか、また、どうしてできないのかを追求できる児童の育成を目指してきた。また、「わかる」ことの根底には、その運動の感覚を身につけることが必要であると考えている。運動における自分の感覚（内感）に気づいたり、周りの児童に感覚を教えてもらったりすることで、より運動についてわかることができる。2点目は、人は運動している際に自らの運動を客観的に見ることはできないという点である。具体的な場面でいえば、跳び箱を跳んでいる自分の姿は自らの目で見ることができない。このことから、自分が行っている運動の感覚と実際に行っている運動には認識のずれが生じている可能性がある。例えば、跳び箱運動の台上前転を行う際、頭より腰が上がることを課題としている時に、自分は腰が「上がっている」つもりでも、客観的に見ると腰は「上がっていない」というずれである。自分の運動の認識と、客観的に見た運動のずれを埋めていくことが体育科の授業には必要な過程だと考える。このずれを埋めるための手立てとして、2点の方法がとられている。児童同士が運動を観察し合うという方法とICT機器などで自分の運動を録画する方法である。しかし、教師が見るポイントを提示せずに活動を始めても、児童はできた、できていないという助言に終わってしまう恐れがある。運動を観察し、相互に気づきを伝えあう場面では、運動の何を見取らせ、何を伝えさせるのか、運動の課題を児童自身が理解しておく必要がある。また、ICT機器を用いて映像を分析する際には、その運動のどこが課題でどのような姿がよりよいものなのかを、児童自身が見取るという力が必要となる。児童同士の気づき、発言、ICTで録画されたものから得られる情報で、運動ができるようになったり、運動が改善されたりするためには、運動を行う児童、周りで運動を

見る児童が運動を見て、課題として捉えることができるかどうかが大切だと考える。また、自分の運動の課題を把握し、周りの児童から得た情報をうまくっていくための有効な情報として取り入れていかなければならない。このような場面では、教師が運動課題をどのように児童に認識させ、児童同士をどうやって関わらせるのかという工夫も必要であると考ええる。

## 2 体育科における〈他者〉

本校体育部では〈他者〉を二点設定している。一点目は、学習で習得を目指す運動像を〈他者〉としてとらえている。運動が習熟していく過程は、自分の外側にある技術を自分の内側の技能として獲得していく過程あると言える。器械運動や水泳における非日常の動きを体験することで新たな運動感覚に出合ったり、その運動感覚を楽しんだりすることができることが運動を行うことの面白さではないかと考える。

二点目は、共同で学習を行う仲間としての〈他者〉である。器械運動や水泳などのクローズドスキルと呼ばれる運動の動きを習熟させていくためには、今行っている動きを修正していくことが必要である。動きを修正するといっても、運動中に自己の動きを客観的に確認することができない。そのため、実際に行った運動が目標としている運動の動きと合っているのか、またどのくらい違っているかということをも自分だけで気づくことは難しい。友達から運動についての評価を受け、その情報を参考にしながら自らの動きを修正していくことになる。また、友達の運動を見たり、友達の運動感覚を聞いたりすることで、それまで自分には無かった運動感覚と新たに出会えると考ええる。(坂田, 2023年)

体育科の運動は、身体的活動であり、目で見える情報のみをやり取りする機会が多い。しかし、運動をする上で必要となるのは、見た姿を模倣するだけではなく、その動きの力の入れ具合や運動を行っている人の感覚をどう自分のものとして獲得し、認識していくかが大切である。自分の感覚というものは視覚することはできない。自己の内面にある手触りや、力の入れ具合などは見えるものではない。それは〈他者〉の動きの感覚についても同様である。坂田(2023)は、「動いているときには、自己の動きを客観的に確認することができない。そのため、実際に行った運動が目標としている運動の動きとどのくらい違っているかということをも自分だけで気づくことは難しい。友達から運動についての評価を受け、それを参考にしながら自らの動きを修正していくことになる。」と述べているように、自分の動きを修正していくには、他者からの視覚された客観的情報や、感覚における客観的情報を自己が取り入れることが必要となる。見えない感覚を伝え合うことで、これまで見えていなかった動きが見えてくることがあると考える。自己の感覚を伝え合うことで動きが「わかる」ことになり、さらに「できる」ことにつながっていくとも考えられる。(文責 河野 吉信)